

9. 原発性肺癌の Tl-201 SPECT における N 因子の描出能について

松野 慎介 川崎 幸子 余田みどり
佐藤 功 玉井 豊理 田辺 正忠
(香川医大・放)

原発性肺癌における Tl-201 のリンパ節への集積程度を調べるために、摘出リンパ節と血液のカウント比をとり SPECT 像および病理所見と比較した。対象は術前に Tl-201 SPECT が施行された 36 症例のうち、手術前日に Tl-201 6 mCi 投与し、手術標本の Tl-201 集積量を計測した 8 例である。36 症例中肺門、縦隔リンパ節の accuracy は 92%、86%で、CT の縦隔リンパ節は 64%と Tl-201 SPECT が CT よりも有意に良好であった。摘出リンパ節と血液のカウント比は真陽性群平均 17.4、偽陽性群 7.3、真陰性群 10.2 で、真陽性群と他の群に有意差が認められた。偽陽性群の病理像は sinus に histiocytosis が全例に見られたが特異的でなく、偽陽性になる条件として解剖学的部位重量が関与しているものと考えられた。

10. 消化管悪性リンパ腫のガリウムシンチグラフィ

片岡 正明 津田 孝治 藤井 崇
望月 輝一 山本 浩司 田中 宏明
菊地 恵一 木村 良子 濱本 研
(愛媛大・放)
小松 晃 (美須賀病院)

消化管非ホジキンリンパ腫 25 例(原発性 18, 続発性 7)(26 病変)のガリウムシンチについて検討し、次の結果を得た。

1. 検出率 88.5% (23/26) と良好なものであった。
2. ガリウムシンチ陰性例は、5 cm 以下(おのおの 2, 2.5, 3 cm)で、検出能は、腫瘍径に最も関連していた。
3. 病変の診断は、X線写真、内視鏡に優るものではないが、ガリウムシンチは、全身検索を含めた経過観察にすぐれている。

11. ガリウムシンチにて“super bone scan”を呈した一症例

山本 博道 (岡山労災病院・放)
岡 雄一 稲垣 登稔 (同・内)
津野田雅敏 清水 光春 新屋 晴孝
平木 祥夫 (岡山大・放)

今回われわれは、骨シンチでいわゆる“super bone scan”の像を呈し、ガリウムシンチでも骨シンチとほぼ同様に強い骨集積を認めた胃癌のびまん性骨髄転移の症例(52歳、女性)を経験したので、報告した。いわゆる“super bone scan”の像を呈する癌の骨転移としては、乳癌、前立腺癌がよく知られているが、胃癌では比較的まれと考えられる。また、胃癌の骨髄転移症例でガリウムシンチでも本例のごとく、肝臓、腸管がほとんど描出されないほど骨髄転移に集積した例はきわめてまれと考えた。

12. 原発性肺癌に対する ⁶⁷Ga-citrate シンチグラフィについて

沖田 功 西原 貞光 宇津見博基
山田 典将 (山口大・放部)
岡田 守久 畠中 雅生 田中 和雄
中西 敬 (同・放)

原発性肺癌のうちから、手術、生検、細胞診等で組織型の判定できた病期を問わない 93 症例について、T 因子の検討を ⁶⁷Ga-citrate の planar 像で行った。

対象症例は 29 歳から 84 歳までで、平均年齢は 66.9 歳、男女比は 1:0.4 で、腺癌 22 例、扁平上皮癌 46 例、小細胞癌 17 例、大細胞癌 6 例、腺表皮癌 2 例であった。

全体の陽性率は 84/93, 90.3%で、4.0 cm 以上の病巣はすべて描出されているが、4.0 cm 未満の病巣は、腺癌 72.8%、扁平上皮癌 78.9%、小細胞癌 80%の描出率で、描出できた最小の腫瘍径は 17 mm のものであった。